



財団法人 日本医薬情報センター (JAPIC)

JAPIC NEWS

No.285

2008

1

Contents

■ 巻頭言	
「新年のご挨拶」 (財)日本医薬情報センター 会長 上田 慶二	2
■ インフォメーション	
JAPIC-Q サービス ユーザ会を開催します	4
第36回JAPIC医薬情報講座開催のご案内	4
新刊のご案内 「JAPIC」ジャビックジャーナルNo.10を11月30日に発行しました	5
JAPIC医療用・一般用医薬品集インストール版2008年1月版 発売	5
■ トピックス	
「第129回薬事研究会」開催	6
JAPICサービスの紹介(10) 講演会・研究会・ユーザ会の開催	7
新入職員紹介	8
「理事会」の概要報告	8
インドネシア保健省から研修生来訪	9
マンスフィールドフェロー来訪	9
アジア諸国薬事行政官の来訪	10
■ コラム	
くすりの散歩道 No.8 イギリスが世界に誇るもの (財)日本医薬情報センター 理事 山地 正克	11
■ シリーズ	
東南アジアの医療事情(21) ベトナム〔1〕 ベトナムの概要と医療事情 国立国際医療センター国際医療協力局(IMCJ)ベトナム医療協力拠点センター長 小原 博	12
■ 図書館だよりNo.211	15
■ 情報提供一覧	15

新年のご挨拶

(財)日本医薬情報センター 会長

上田 慶二 (Ueda Keiji)



明けましてお目出とうございます。皆様におかれましては、ご家族お揃いで明るく楽しいお正月をお迎えになったこととお慶び申し上げます。また皆様のお仕事の場におきましても、新年の新しい希望を持ち、新たなご計画をお考えになっておられることと拝察申し上げます。

近年、医療・薬学の領域におきましても再生医療、遺伝子治療、分子標的医療やアンチエイジング医療など、新しい分野においてめまぐるしい改革と進歩が見られるようになり、皆様のご専門の領域におかれましても本年における新しい計画と期待をお持ちのことと拝察申し上げます。

財団法人日本医薬情報センター(JAPIC)役職員一同におきましても新年にあたり、当財団の使命を再確認し、サービスの拡大と公益性の追求を一層図りたいと決意を新たにしているところであります。

さて、JAPICの事業につきまして、昨年を振り返ってみますと、伝統の「医療用医薬品集」は、独自での編集・発行が3版目となり、姉妹品である「一般用医薬品集」と共に医療機関等にだいたい浸透してまいりました。また、「医薬文献・学会情報速報(Qサービス)」については、基本料金的大幅な値下げを実施し、さらに製薬企業からの個別の要望(QXサービス)に対応する事業も立ち上げ、サービスの向上に努めました。その他、「重篤副作用疾患別対応マニュアル」、

「日本の新薬」追加版や「日本医薬品名事典」の発行などいろいろな新しい事業にも取り組みを行い、概ね目標を達成することができました。これもひとえに会員の皆様、関係者の皆様のご支援の賜と感謝を申し上げます。

本年は、第三期中期3か年計画の初年度を迎えます。その基本理念として、医療、医薬関係者のニーズを常に念頭におき、医薬品情報提供の専門センターとしての自覚をもち、事業の充実、サービスの向上を図ることを心掛けたいと存じます。

具体的には、まず添付文書情報関連では、ITの進歩により医薬品情報の電子化が進む中でもなお重要な位置を占めている「JAPIC 医薬品集」の内容充実と一層の普及を図ると共に医薬品集関連商品の開発も計画しております。

また、主力事業である文献・学会情報データベース「JAPIC-Q、JAPIC-QX」等の充実を図り、さらにJAPIC独特のサービスである海外規制措置情報「JAPIC Daily Mail」や「Regulations View」の普及・拡大を図りたいと考えております。こうした事業の推進によりJAPICの知名度の向上をより一層図ってまいります。

特に、今年の重要課題として、「添付文書情報データベース」と「病名データベース」そして書籍「添付文書記載病名集(改訂版)」の普及に注力してまいりたいと考えており



ます。病名データベースは、医薬品の効能効果と標準病名を関連付けしたもので、医薬品の適切な選択ができると同時に、電子カルテ、オーダーリングシステムへの導入、標準病名の普及にも役に立つものと認識しており、添付文書情報データベースとセットでの普及を進めてまいります。

さて、私は内科医であります。治療上における薬物療法は極めて重要であると認識しておりますが、その医薬品についての安全性と有効性の検証は絶えず必要であると信じております。医師や患者さんの立場からみると、新医薬品はもとより、すでに市販されている医薬品についても、継続的な安全性、有効性の確認は重要な要素であります。JAPICとしまして、その確認の方策について何ができるのか検討したいと考えております。

その一方で、医薬品の開発ならびに安全性の確保に当たり、日、米、EUの規制当局並びに製薬業界はICHという機構を構築して、国際的な共通の規制ならびに共通のガイドラインを作成して、迅速な開発と承認に貢献しているところであります。JAPICも「JAPIC Daily Mail」等を介して迅速な海外情報の普及に努力していますが、今後とも内容の充実と一層の普及に努めてまいります。

JAPICの会員状況でございますが、企業会員は大型合併により減少の要因もありますが、新規加入される企業もあり全体では横這いで推移しております。一方、医療機関、大学等は診療所や薬局の増加がみられ、会員総数は増加傾向を示しております。新たに会員に加入していただくため、価値の高い情報を提供し、JAPIC会員の意義が認められるようさらに努力を重ねたいと存じている次第であります。

そして、JAPICが保有しております医薬品情報を製薬企業のみならず医学・薬学教育機関、医療機関、薬局、医薬品卸売業者等にも、さらには非会員の方々にもご利用頂けるような仕組みをいろいろ考えております。こうした努力により当財団の公益性の確保を果たしたいと願っております。

終りに当たり、本年も皆様にとって良き一年でありますようお祈りいたします。

Information インフォメーション

JAPIC-Qサービス ユーザ会を開催します

「平成19年度JAPIC-Qサービスユーザ会」を開催いたします。JAPIC-Qサービスユーザの皆様には、別途詳細なご案内と申し込み用紙をお送りいたします。多数のご出席をお待ち申し上げます。

開催日 2008年1月28日(月) 15:00～17:30

会場 日本薬学会長井記念館ホール(東京都渋谷区渋谷2-12-15)

第36回JAPIC医薬情報講座開催のご案内

日時 2008年3月6日(木)～7日(金) 2日間

テーマ 「医療の安全対策と医薬品情報」

会場 日本薬学会長井記念館ホール(東京都渋谷区渋谷2-12-15)

定員 毎日の定員は180名

申込期限 2月22日(金)(先着順)満席の場合はその旨ご連絡いたします。

申込方法 参加者1名毎に、JAPICホームページ<http://www.japic.or.jp>掲載の医薬情報講座入力フォームにご記入の上、お申し込みください。
聴講券、請求書をお送りいたします。当日受付会場でテキストをお渡します。

参加費 1人1日ごとに、1万円(JAPIC会員は5千円)

プログラム 1日目 3月6日(木)

10:00～10:10 理事長挨拶
10:10～11:50 薬価制度について 厚生労働省医政局経済課 近澤 和彦 先生
11:50～13:00 (昼食)
13:00～14:00 安全対策の取組み(仮題) 厚生労働省医薬食品局安全対策課 講師未定
14:00～15:00 看護師から見た医薬品と医療安全(仮題)(社)日本看護協会常任理事 楠本 万里子 先生
15:00～15:20 (休憩)
15:20～16:50 呼吸器系重篤副作用への対応 信州大学医学部内科学第一講座教授 久保 恵嗣 先生
17:00～18:30 懇親会 (長井記念館ホール・ロビー)

2日目 3月7日(金)

10:00～11:00 医療機関への情報提供 製薬企業の立場から 講師未定
11:00～12:00 日病薬:情報提供に期待するもの 虎の門病院薬剤部長 林 昌洋 先生
12:00～13:10 (昼食)
13:10～14:10 患者向け医薬品ガイド 日本製薬工業協会 黒木 正 先生
14:10～15:10 日病薬:専門薬剤師への取組み 島根大学医学部附属病院 教授・薬剤部長 岩本 喜久生 先生
15:10～15:30 (休憩)
15:30～16:30 副作用等報告について(仮題) (独)医薬品医療機器総合機構 安全部 講師未定
16:30 閉会の挨拶

*講師の先生、演題は変更することがありますのでご了承ください。

新刊のご案内「JAPIC Jジャピックジャーナル」No.10を11月30日に発行しました

No.10には本年開催しました薬事研究会や講演会、ユーザ会での特別講演などをまとめて掲載しております。会員の皆様にはすでにお送りしておりますがご希望の方には贈呈いたしますので必要部数をご連絡ください。
(TEL:0120-181-276)

目次

医薬品情報:時の動き

一人の百歩より百人の一歩	中野 克彦
病院薬剤師今昔	依田 啓司
ヒトの遺伝子の進化とその能力	三塩 晋作
安全性確保と危険予知	林 昌洋
還暦の風景	羽入 直方
入学試験から英語をなくして、日本人の英語力を向上させよう	松木 則夫
医薬品流通コードについて	武隈 良治
有効で安全な医薬品を迅速に提供するための取組について	山本 弘史
国際共同治験のガイダンスについて	佐藤 岳幸
重篤副作用疾患別対応マニュアルの作成について	井上 隆弘
血液系副作用への対応—重篤副作用疾患対応マニュアルから	檀 和夫
添付文書記載病名データベース	JAPIC

JAPIC医療用・一般用医薬品集インストール版2008年1月版 発売

2008年1月下旬に「JAPIC医療用・一般用医薬品集インストール版2008年1月版」を発売いたします。

■ 仕様

医療用医薬品および一般用医薬品の自由語検索・規制情報検索、医療用の薬剤識別コード検索などの検索機能を搭載し、医薬品集本文表示機能、iyakuSearch収載医療用医薬品添付文書PDFへのリンク・表示機能などの各種情報表示機能を搭載しています。

医療用医薬品集本文編集・テキスト出力機能・採用品データ引継機能などの院内採用医薬品集作成補助機能、YJコードリストから採用品への一括登録ツール(Windows専用)も収録しております。Windows・Macintosh対応。なお、収載データの増大に伴い、1月版の提供媒体はDVD-ROM又はCD-ROMの2種類になります(内容・価格などは同一です)。

■ 収録データ

医療用医薬品データ:2008年1月上旬(予定)までのJAPIC医療用医薬品添付文書情報・薬剤識別コードデータおよび薬価データを収録

一般用医薬品データ:2007年12月(予定)までのJAPIC入手添付文書に基づくデータを収録

■ 価格・お申し込み

15,000円(税・送料込)

年間セット(1・4・7・10月版の4枚セット) 25,000円(税・送料込)

まとめてご購入いただく際には割引制度などもございますので、事務局 業務・渉外担当
(TEL:0120-181-276、FAX:0120-181-461)まで、お問い合わせください。

T TOPICS

「第129回薬事研究会」開催

第129回薬事研究会を12月4日(火)科学技術館サイエンスホールで開催しました。サイエンスホールは北の丸公園内にあり、紅葉が見頃で、参加者には目の保養にもなった研究会でした。

はじめに、厚生労働省医薬食品局安全対策課長 松田 勉氏より「安全対策における行政の最近の動き」の演題で講演がありました。内容は大きく分けて二つ、“医薬品の市販後安全対策について”、“医薬品関連事故防止対策について”でした。医薬品の市販後安全対策では、方向性として予測予防型の安全対策を従来の警報発信型に加えること、情報収集・情報提供として、副作用報告制度、企業からの副作用報告の公開、患者向け医薬品ガイド、重篤副作用疾患総合対策事業、市販直後調査の概要説明がありました。医薬品関連事故防止対策では、ヒヤリ・ハット事例収集事業、販売名類似対策として、医療用医薬品の販売名ルール化(New DrugとGeneric Drug)、個別対策事例としてインスリン製剤販売名命名の原則、医療用配合剤の販売名、ヘパリン製剤(注射液)の販売名など、および医薬品類似名称検索システム(運用JAPIC)について説明がありました。平成19年11月現在、医療事故防止対策に係る販売名変更の代替新規申請件数は、総計2,987件、承認件数は19年4月まで総計1,888件とのことです。

次いで、医薬品医療機器総合機構顧問の早川堯夫氏より「バイオ医薬品をめぐる最近の動向」の演題で講演がありました。バイオテクノロジーの医薬品創製への応用(バイオ創薬)として、日本で承認された細胞基材由来タンパク



紅葉の北の丸公園

質性医薬品、日米EUで承認された抗体医薬品および融合タンパク質医薬品、日本で開発中の組換えタンパク質医薬品、英国における2006年の抗体医薬品TGN1412事件と教訓、後続(後発)バイオ製品(EUではBiosimilar、米国ではFollow-on)の開発など、遺伝子治療、細胞治療・再生医療、細胞・組織製品の開発・申請の流れ(確認申請など)、ヒト(自己)由来細胞・組織加工医薬品等の品質及び安全性確保に関する指針(案)、バイオ創薬の適正かつ効果的な進展に必要な要素、バイオ医薬品の臨床試験のあり方など、たくさんのスライドを用いて詳細に説明していただきました。バイオ医薬品の開発から安全性まで最近の動向について知ることができ、バイオ医薬品の理解と整理に役立ったのではないかと思います。(A)



サイエンスホール会場

JAPICサービスの紹介(10) 講演会・研究会・ユーザ会の開催

JAPICでは毎年医薬品およびその関連内容について会員の皆様を対象に講演会・研究会・ユーザ会を開催しております。過去に開催したテーマをご紹介します。

(1) 医薬情報講座

毎年3月初旬に2日間開催。時宜に適った医薬品情報と行政の話題を中心にプログラムを組んでいます。1日目は行政や医薬関連団体、2日目は企業および医療、教育等の現場から講師をお願いしています。(有料)

- 2003年 「薬事法改正と医薬情報」 10演題
- 2004年 「医療安全と医薬品情報」 8演題
- 2005年 「患者中心の医療と医薬品情報」 8演題
- 2006年 「医療安全に向けた医薬品情報提供」 11演題
- 2007年 「医療の安全対策と医薬品情報」 10演題

(2) JAPIC講演会

会員および一般の方を対象に毎年1~2回開催しています。(無料)

- 2005年 「医薬品の適応外使用情報の活用」 4演題
- 2005年 「医薬品と薬学教育」 4演題
- 2005年 「患者のための最適医療の実現」 6演題
- 2006年 「臨床試験情報の登録と公開のためのデータベース“臨床試験情報”説明会」-試験結果の登録と公開を中心に 3演題
- 2006年 「最新テクノロジーと医療」-これからの医療、その可能性を巡って<IMIC・JAPIC合同セミナー> 3演題
- 2007年 「重篤副作用疾患への対応」 2演題

(3) 薬事研究会

年2~3回開催。薬事行政に係るその時々の問題点について行政、関連団体の方々に解説、講演をいただいています。(有料)

- 2006年 「医薬品医療機器総合機構におけるGMP調査について」
「GMP調査を受けるにあたっての留意点」
- 2006年 「医薬品販売制度改正について」
「薬事法改正に基づく薬局薬剤師の対応の考え方」
- 2007年 「最近の監視指導行政について」「医薬品製造販売業許可更新時の留意点」
- 2007年 「有効で安全な医薬品を迅速に提供するための取組みについて」
「医療安全に向けた医薬品情報提供」「国際共同治験のガイダンスについて」
- 2007年 「安全対策における行政の最近の動き」「バイオ薬品をめぐる最近の動向」

(4) ユーザ会

毎年6月初旬に東京と大阪で会員機関の方を対象に開催。

JAPICの事業活動と年度事業計画についてご説明しています。また、ここではJAPICの情報をご利用いただいているユーザーさんに活用事例をご紹介いただき、作成者側と利用者側の相互理解に役立てています。他社の活用事例を知る機会として好評です。

11月から12月にかけてJAPICの情報活動について学びたいと希望される外国の方々が相次いで来訪されました。ここでは訪問内容の一端をご紹介しますことにします。

■ インドネシア保健省から研修生来訪

11月26日(月)インドネシア保健省に勤務しているMr. SUGIANTO Muhammad TaufikとMs. Sari Mutiaraniの2名が独立行政法人国際協力機構(JICA)の依頼により、研修に来られました。

国際協力機構(JICA)では開発途上国の経済・社会開発に必要な人材を養成する一環として研修受け入れ事業を行っており今回は「平成19年度インドネシア国別研修「医薬品情報および医薬品管理／医薬品製造管理」に係る講義依頼」の中でJAPICの情報活動について研修希望があり来訪されたものです。

本誌の7月号(No.279)から9月号(No.281)まで3回にわたり在インドネシア保健省の宇津忍氏にインドネシアの薬事情についてシリーズでご紹介していただいたこともあり、宇津氏とも懇意であるお二人は大変フレンドリーで終始なごやかな雰囲気の中での研修となりました。

Sariさんは情報公開、セミナー、教育、安全性情報の収集などを担当しているとのことで、JAPICの業務の中で特に興味を持ったのは「iyakuSearch」と「JAPIC Daily Mail」で、情報収集の方法や仕組みについて、また「新薬承認審査報告書DB」や「学

会情報」、「規制措置情報」について検索方法や更新頻度など具体的な質問が

出されました。添付文書情報をPDFで公開している仕組みについて、インドネシアでもできれば添付文書や安全性情報を集めてホームページで公開したいとの感想を述べられました。また講演会、研究会などの開催についても実際にインドネシアで担当されていることもあり、有料、無料も含めJAPICの情報提供の方法について関心を示されました。JAPICが国内向けの情報提供を主としているため、英文書籍やデータベースを作成していない点が残念との感想を持たれました。SUGIANTOさんは「JAPIC構造式集」に関心を持ち使用したいとのことでしたので贈呈しました。

来日間もない日本の印象を尋ねると、表参道で道路を歩いている人が多いのに驚いたとの感想。ジャカルタでは近くでも乗り物に乗る人が多く歩かないので道路が混雑して非効率であるが、日本は効率的と感じたとのこと。ささやかですがこのような交流の積み重ねの大切さを実感したひと時でした。(T)



図書館を見学

■ マンスフィールドフェロー来訪

12月5日(水)マイク・マンスフィールドフェローのシーマ・ハシミさんが日本における研修の一環としてJAPICを訪問されました。

これは元駐日米国大使として活躍されたモーリーン・アンド・マイク・マンスフィールド財団が運営している研修で、米国連邦政府職員が日本の政府、政界、経済界、学会等を訪問・研修して学び、その結果日本への理解を深め、更に様々な分野のプロフェッショナルなネットワークを築く事を目的としているようです。今年は12回目を迎えるそうです。

米国保健福祉省から選ばれたシーマさんはFDA長官室で国際政策分析官として活躍されている方ですが、今回1年間の予定で、厚生労働省、医薬品医療機器総合機構、外務省、製薬協、東京税関等で研修される予定だそうです。その内、1日のみですが、日本における医薬情報の概況を研修す

るためJAPICを訪問されました。

研修ではJAPICの事業活動の概要、添付文書関係業務、海外規制情報の取り扱い、国内医薬文献情報の取り扱いの説明を担当の職員から行なった後、質問を受け、また相互理解のために討議を行いました。その後、JAPIC医薬情報のデータベースiyakuSearchの実演を行ない、かつ情報の普及の取り組みについても説明しました。最後に説明者が全員参加して総合的にディスカッションを行いました。アメリカと日本の医薬情報、ICHに対する取り組み等の質問も何点かして相互理解に有意義であったと思います。

今回のJAPICでの研修がハシミさんの日本の医薬情報に関する理解の一端のお役に立つことを願っています。(Y)



中央がシーマ・ハシミさん

■ 新入職員紹介



石田 順子 (Ishida Junko)

(添付文書情報担当)

11月から常勤嘱託職員に採用されました石田順子と申します。地方公務員を退職してから実験の世界に足を踏み入れて、創薬に関わる研究室を渡り歩いて参りました。産学連携の研究室に在籍した際には、製薬会社の方とお話する機会もありました。「薬が創りたいんです」と照れもなく話す純粋な言葉とそれに付随するdedication(献身)はすさまじいもので、それでも薬になるのは宝くじに当たるような確率。添付文書を見る度にしのぎを削る彼(女)らを思い出し、畏敬の念を抱き未だにむげにコピーを捨てられないのは私だけでしょうか？

趣味は数年前から始めた柔道です。動機は、技と体力を活かして寝たきりのお年寄りの方をお風呂に入れる介護の仕事をしている黒帯の女性に触発されたからです。しかし、私にとっての柔道は英語修得に似て、いつまでたっても上達せず、得意技は判定負け。どなたかお得意な方がいらっしゃったらご教授していただけないでしょうか。未熟者ではございますが、会員の皆様をはじめ関係者皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

■ 「理事会」の概要報告

11月26日(月)に第107回理事会を開催いたしました。議題は以下のとおりであり、すべて原案どおり承認・議決されました。

今回の理事会は、今年度で第二期中期3ヵ年計画が終了することから、新たに策定した「第三期中期3ヵ年計画及び平成20年度事業計画策定の基本方針」を中心にご審議をいただきました。この計画の策定に当たっては事前に開催した「事業委員会」の意見を取り入れております。

まず、第三期中期3ヵ年計画では①JAPIC事業の一層の発展のための計画、②JAPICデータベースの拡大及びユーザの利便性のための改良・開発、③医薬品情報提供サイトの構築、④JAPICの情報普及及び知名度向上、の4施策に注力して事業を遂行することが了承されました。

また、平成20年度の事業計画においては、この中期計画が達成されるよう病名データを含む添付文書情報データベー

ス、医薬文献・学会情報速報(JAPIC-Q、Q plus、QX)、海外規制措置情報(JDM)等の重点事業の普及・拡充を説明し、了承されました。

今後、この基本方針に基づき、平成20年度事業計画を作成して平成20年3月に開催予定の理事会・評議員会に提案いたします。

○「平成19年度第2回理事会(通算第107回)」

11月26日(月) 14:00～15:20、当センター3階会議室
《議 題》

1. 維持会員・賛助会員の異動承認について
2. 平成19年度上期事業・収支状況報告について
3. 第三期中期3ヵ年計画及び平成20年度事業計画策定の基本方針について
4. 公益財団法人の認定について

アジア諸国薬事行政官の来訪

12月10日(月)午前中ASEAN諸国の薬事行政官7名の方々がJAPICを訪問されました。この訪問は、日本国政府によるODAの一環としてASEAN諸国及び他の発展途上国の薬事行政を担当する行政官を対象に昭和60年から実施されている研修の一部を占めるもので、研修自体は独立行政法人国際協力機構(JICA)が主催し厚生労働省、社団法人国際協力事業団(JICSWELS)が協力しているものです。今回が23回目を迎えるということです。

今回の参加者はボツワナ、カンボジア、インドネシア、マレーシア、パプアニューギニア、フィリピン、ベトナムの7ヶ国7人の行政官で11～12月に1ヶ月の予定で来日し、厚生労働省、医薬品医療機器総合機構、地方自治体、製薬協、大学等を訪問し、薬事行政に参考となる研修を行なっているとのこと。その一つとして「医薬品情報に関する活動」が挙がり半日JAPICを訪問されたわけです。7名の行政官の方々は全て母国で薬



ASEAN諸国の薬事行政官の皆さん

剤師の資格を持ち行政に従事されています。

JAPICよりJAPICの医薬品情報に関する事業、即ち添付文書、文献・学会等の安全性情報内容や情報普及に関する活動を説明後、データベースであるiyakuSearchの実演を行ないました。質問では、JAPICの構成人員数、薬剤師資格者数や予算等管理に関するものがあり、また医薬品類似名称検索システムに興味をもたれた方がおられました。一般にJAPIC諸情報のデータ更新の頻度や速さについては驚いた様子でした。

その後JAPIC図書館及び事業部門のオフィスの見学が行なわれました。各国の国情もあり、どの程度実務的に参考になったかは不明ですが、少なくとも日本の現況の理解にはなったと思います。(Y)



JAPIC活動について説明を聞く

イギリスが世界に誇るもの

(財) 日本医薬情報センター 理事 山地 正克 (Yamaji Masakatsu)

かなり前のことで記憶が定かでないが、丸谷 才一さんがある雑誌の巻頭言で「イギリスには世界に誇れるものが4つある。中距離ランナー、スパイとスパイ小説、そして何故か製薬である。」というふうなことを書いておられた。つらつらこれらに共通のことはあるか、あるとすれば何かということが気になっていた。

スパイとスパイ小説は良く分る。ジェームス・ボンドを生み、ジョン・ル・カレやケン・フォレットをはじめとして数多くのスパイ小説家が出ており、更にスパイ事件そのものは大戦中、あるいはその後の冷戦中のみならず、現在でもイギリスを舞台によく現れたりする。伝統的にイギリスは国防上欧州大陸に強国を作らせない為、防諜に力を入れ諸々の情報を集め分析し、合従連衡を画策したり事件を未然に防ぐ策謀を練ってきた伝統がある。その過程の諸々の経験もあって、スパイ及びスパイ小説が誇れることは容易に納得できる。

しからは中距離ランナー、製薬は何故か？中距離ランナーは今でもイギリス人にポピュラーでありまた得意かどうかは知らないが、粘り強さか、あるいはレースでの駆け引き、という知的ゲーム故と考えられるからであろうか？短距離だと駆け引きは少なくアツという間に終わってしまう。しかし粘り強さ、駆け引きという点ではマラソンも同じではないか。そして女王ポーラ・ラドクリフが居るではないか。

製薬はどうか。近年国際的にはアメリカが突出しており、アメリカに席卷されるように見えてもイギリスは他の欧州諸国よりは活発である。ペニシリン以来数多くの新薬を産出してきた伝統

がある。製薬協の調べでも世界の売上高 Top100品目の原産国は米、英、日の順になっており依然として強い。日本の企業も欧州開発事務所はかつてはドイツに多くあったが、現在はイギリスに数多く移り、また欧州医薬品庁もイギリスに置かれているのもそれを支持しているようにも見える。製薬は知的ゲーム(ゲームと云ったら不謹慎と怒られるかも知れないが)の最たるもの、ということは出来よう。アメリカ流のパワー、性急さとは違ったじっくりした製薬(ゲーム)の運び方が国民性にマッチしているのであろうか。

してみれば、これらをこじつけて、イギリスの誇る首記4項目は、粘り強い、知的ゲームという共通項で括れるだろうか。いやいやそれもあるかも知れないがこれらは常に“孤独”ということが付きまとわるのではないか。スパイにしる、スパイ小説にしる、中距離陸上にしる。

薬はそういうイメージは似つかわしくないが、創業の過程では常に“孤独の闘い”が出てくるのではないか。イギリスの年がら年中どんよりした天候が影響し、これらの活動がイギリス人の得意なところとしてフィットしているのではないか。

……等、等 勝手な解釈をすればドンドン現実と遊離してしまうかも知れないのでこのあたりで止めておきましょう。そもそも共通項などないかも知れないし。

Series シリーズ

～東南アジアの医療事情 (21)～



ベトナム [1]

ベトナムの概要と医療事情

国立国際医療センター国際医療協力局
(IMCJ-ベトナム医療協力拠点センター長)
小原 博 (Ohara Hiroshi)



現在、ベトナムは発展著しい国として注目されており、訪れる外国人も増加の一途を辿っています。しかし、このような平和な生活を獲得したのはつい最近のことであり、ベトナムの歴史を眺めてみて、これほど長い期間平和が続いた時期は極めて稀なことです。

筆者が初めてベトナムで医療の実情に関する調査を行ったのは1993年でした。その後、バックマイ病院プロジェクト・チーフアドバイザー、保健省政策アドバイザーなどを勤めました。2007年11月からは国立国際医療センターベトナム医療協力拠点センターで共同研究、研修、人材交流を主とした仕事をしています。初回の原稿はベトナムの一般事情から入り、医療事情の概要紹介を試みました。

1.ベトナムについて

(1) 一般事情

ベトナムはインドシナ半島の東端に位置し、面積33万km²(日本から九州を除いた大きさ)、人口8,400万人の社会主義国家です。南北に細長く、北と南では気候も人々の気質も異なります。北部は亜熱帯気候で四季があり、冬は底冷えがする寒さが続きます。一方、南部は熱帯性の気候で年間を通じて気温は高く、雨季と乾季があります。54の民族から構成されていますが、人種的に日本人に近いキン族が90%以上を占め、主に平野部に住んでいます。他の少数民族は主に辺境地域や山間部に住んでいます。

大乘仏教と儒教が浸透し、文化や生活習慣についても日本と似通った雰囲気を感じます。江戸時代の直

前まで日本人が頻繁に往来し、所々に日本人町が形成されていました。現在、ベトナムにとって日本は中国と並ぶ最大の貿易相手国です。町を歩くと自動車、オートバイ、電気製品など日本製品が目立ちます。日本への主な輸出品は繊維製品、海産物、木工品、石炭、原油です。そのほか、米、コーヒー、胡椒、ゴムなどが主な産物として挙げられます。

(2) 歴史

ベトナムの歴史は外敵の侵入に対する抗争と内乱の繰り返しと言っても過言ではありません。起源前111年から939年まで1000年以上続いた漢(中国)の支配から脱した後も内戦が続きました。都をタンロン(現ハノイ)に制定して安定した王朝(李朝)が成立したのは1010年のことでしたが、1224年に滅亡して陳王朝が成立しました。その後、元や明(中国)の侵略を受け、明の支配から脱してベトナム統一を果たしたのは1428年のことでした。しかし、まもなく諸侯の抗争が起き、内戦状態が続きました。

1779年に清軍を撃退したのち、1806年に都をフエに移してグエン王朝が成立しましたが、まもなくフランスの侵略が始まり、1884年には植民地となりました。第二次世界大戦中は日本軍の占領下に置かれ、この間多数の人々が餓死したのは大変嘆かわしい出来事でした。大戦終結後、ホーチミン大統領により独立宣言が公布されました(1945年)。しかし、フランスは再侵略を開始し、第一次インドシナ戦争が勃発しました。戦争は1954年のディエンビエンフーの戦いをもってベトナムの勝利に終わりましたが、ジュネーブ協定の結果、南北に分割



写真1 フランス軍の要塞跡と戦勝記念碑（ディエンビエンフーの戦い）

され内戦状態に陥りました（写真1）。

1964年からはアメリカ軍が本格介入しベトナム戦争が激化しました。この戦争では300万人以上のベトナム人が死亡したほか、散布された多量の枯葉剤や多数の不発弾は今なお深刻な後遺症を残しています。戦争は1975年のサイゴン陥落をもって北ベトナム側の勝利のもとに終結し、翌年南北統一国家が樹立されました。しかし、カンボジア侵攻（1978年）、中越戦争（1979年）が続発し、真の平和の訪れは1980年のことでした。

ベトナム戦争後、資本主義諸国との交流は途絶えていましたが、1986年に市場経済導入と対外開放を骨子とする新政策（ドイモイ政策）を導入してから、我が国との関係は急速に深まりつつあります。現在、日本はベトナムに対する最大の援助国となっており、医療、教育、道路建設、農業、電力など様々な分野で協力が行われています。民間レベルでの投資も進展しています。

2.医療の現状

(1) 疾病構造

近年、経済成長に伴う生活状況や栄養状況の改善、医療システムの整備、保健医療政策などが奏功し、乳幼児死亡率（17.8%）、妊産婦死亡率（80.0/10万人）、平均寿命（71.3歳）など、多くの保健医療指標は改善を示しており（2005年）、感染症の比率は減少しました。しかし、高血圧、糖尿病、脳卒中、悪性腫瘍など非感染性疾患、交通事故、中毒、精神疾患などが急増しています。

下痢症、肺炎、寄生虫感染などは減少していますが、地域により罹患率に大きな差が見られます。拡大予防接種計画（EPI）に基づく接種率は高い値を示しており（97.8%）、接種対象疾患は著しく減少しています。ポ

リオは根絶され、ハンセン病と新生児破傷風は制圧されました。マラリアは1980年代には保健医療上最も重要な疾患でしたが、1991年以降、国家プログラムとして蚊帳の推進やプライマリレベルにおける早期診断と治療（アルテシニン座薬による治療は大きな成果を挙げた）などからなる強力な対策を推進した結果、著明な減少を示しています。

近年、大きな問題を呈している感染症はHIV/AIDS、結核、鳥インフルエンザ、SARS、デング熱などの新興再興感染症です。最初のHIV感染例が報告されたのは1990年（ホーチミン市）ですが、その後全国に広がり感染者数が急増しています。結核患者の早期発見や治療は成果を挙げていますが、新患発生数は減少していないのが実情です（年間14.5万人の新患）。AIDSに併発する結核症例も増加しています。2003年のSARS流行時にはベトナムは世界に先駆けて制圧に成功しました。しかし、2003末からは鳥インフルエンザの流行に直面しています。2007年8月までに合計100例の患者（死者45例）が発生しましたが、その後患者発生はありません。保健省と農業省の共同作業のもとに、家禽対策のほか、サーベイランス体制の整備、医療機関の診療能力向上、住民に対する啓発、検査施設の整備、研究能力向上、治療薬の備蓄などに尽力しています。

(2) 問題点

近年、ベトナムでは地域差と所得間格差が拡大しつつあります。医療の面でも格差が拡大し、都市部では改善が進みましたが、北部山岳地域や中部地域など遠隔地では今なお劣悪な状況を呈しているのが実情です（写真2）。

とくに乳幼児死亡、妊産婦死亡、栄養障害、下痢症や肺炎などの感染症で都市と農村における格差が顕



写真2 ラオス国境付近の病院と少数民族

著です。新興感染症、高血圧、糖尿病、脳卒中、悪性腫瘍、交通事故、中毒、精神疾患などが新たな問題を呈しており、これらに関する対策は重要な課題です。医療従事者の再教育、救急・レファラルシステム、保険制度、病院における医療の向上などについても一層の取り組みが求められています。

(3) 保健医療政策

戦争による荒廃と膨大な債務、資本主義諸国の経済制裁などにより、平和な時代が到来した後も経済は困窮を極め、人々の生活は極度に困窮していました。医療の面でも病院の施設・機材不足、老朽化、医療従事者の訓練不足など深刻な状態に陥り、各医療施設は本来の機能を発揮できず、ヘルスシステムは空洞化した状態でした。しかし、ドイモイ政策が奏功して1990年代後半からベトナム経済は目覚ましい進歩を遂げ、医療の面でも著しく改善が進みました。

保健省が実施してきた主な改革として、民間保健医療サービスの自由化、医薬品製造・販売に関する規制緩和、保健医療サービス利用者負担の導入、政府によるコミュンレベル医療従事者への給与支払い、医療保険制度の導入などを列挙することが出来ます。2001年以降は保健サービスの質向上、社会的弱者（貧困者、戦傷者、少数民族など）に対する配慮、新興感染症・地域格差・非感染性疾患や交通事故の増加など近年浮上してきた問題への取り組みを重視しているのが特徴です。

現在、保健医療政策は「社会経済開発10ヵ年戦略(2001～10年)」と「保健医療セクター10ヵ年戦略(2001～10年)」を基盤として実施されています。前者は1) 一次～三次レベルまですべての医療レベルにおける保健医療サービスの質改善、および2) 公正性と効率性の重視を骨子としており、後者はa) すべての国民にプライマリーヘルスケアを提供、b) 質の高い医療の実現、c) 罹患率の低下と平均寿命向上を上位目標に掲げています。2003年末より、貧民に対する救済措置が拡大され、無料減額措置を受けられる人が増加しました。2006年末における医療保険加入率は40%に増加しています。保健省は2010年末までに加入率を100%にする計画を進めています。

さらに、疾病予防及び感染症監理に関し国家プロゲ

ラムを策定実施中であり、以下の9プログラムに高い優先度を与えています。

① EPI、② 結核対策、③ マラリア対策、④ HIV/AIDS対策、⑤ 栄養状態改善、⑥ 母子保健、⑦ デング熱対策、⑧ 食品の安全と衛生対策、⑨ コミュニティーレベルの精神衛生対策。

ヘルスシステムの特長として、国レベルからコミュンレベルに至るまで、ヘルスネットワークが構築されていることを強調したいと思います。省レベルまでは治療と予防は別組織で実施されていますが、郡レベルでは郡保健センターがこれらを一括して管理・実行する体制をとっています。コミュンヘルスセンターは一次医療に加え、予防活動、国家保健プログラム、PHCを住民に対し最も身近な立場で実践しています。

3. 日本政府による医療協力

1966年から75年にかけて、サイゴン市（現ホーチミン市）のチョーライ病院やサイゴン病院に対する協力が行われましたが、ベトナム戦争後中断した状態が続いていました。医療協力が再開されたのは1990年代に入ってからであり、南部・北部・中部における拠点病院（チョーライ病院、バックマイ病院、フエ中央病院）に対する協力と拠点病院を活用した下位病院への技術指導、中部のゲアン省における母子保健対策、ホアビン省病院を核としたヘルスシステム構築、麻疹対策、EPI、新興感染症対策など様々な協力（技術協力及び無償資金協力）が実施されてきました。これらはベトナムの医療に少なからず貢献してきたと思われます（写真3）。

（次号続く）



写真3 バックマイ病院プロジェクト（JICA）における技術指導

【新着資料案内 平成19年11月15日～平成19年12月7日受け入れ】

図書館で受け入れた書籍をご紹介します。この情報は附属図書館の蔵書検索 (<http://www.libblabo.jp/japic/home32.stm>) の図書新着案内でもご覧頂けます。これらの書籍をご購入される場合は、直接出版社へお問い合わせください。閲覧をご希望の場合は、JAPIC附属図書館 (TEL 03-5466-1827) までお越し下さい。

＜配列は書名のアルファベット順＞

書 名	出版社名	出版年月	ページ	定 価
American Drug Index 2008 52th ed. 著者名／Norman F.Billups	Wolters Kluwer Health	2007年	1,141p	¥15,162
第十五改正日本薬局方 第一追補 著者名／厚生労働省	厚生労働省	2007年9月	258p	
医薬品企業総覧 2007 著者名／じほう	じほう	2007年11月	1,058p	¥23,100
JAPIC-医薬品名事典 (医療薬・一般薬) 著者名／(財)日本医薬情報センター 編	日本医薬情報センター	2007年11月	1,134p	¥3,990
日本病院薬剤師会会員名簿 2008 著者名／日本病院薬剤師会 監修	薬事新報社	2007年11月	683p	¥17,850
レセプト・カルテ記載のためのICD-10対応 標準病名ハンドブック 2006 標準病名マスター ver.2.50 著者名／医療情報システム開発センター 編	社会保険研究所	2006年6月	1,025p	¥7,875
市場化の時代を生き抜く図書館 指定管理者制度による図書館経営とその評価 著者名／高山 正也 他監修	時事通信社	2007年11月	251p	¥2,940
登録販売者試験 想定問題集 著者名／薬事日報社 編	薬事日報社	2007年11月	491p	¥4,200



情報提供一覧

【平成19年12月1日～12月28日提供】

出版物がお手許に届いていない場合、宛先変更の場合は当センター事務局 業務・渉外担当 (TEL 03-5466-1812) までお知らせ下さい。

情報提供一覧	発行日等	データベース一覧	更新日
＜出版物等＞		＜iyakuSearch＞	http://database.japic.or.jp/
1.「医薬関連情報」12月号	12月21日	1.医薬文献情報	月 1 回
2.「Regulations View Web版」No.148	12月21日	2.学会演題情報	月 1 回
3.「添付文書入手一覧」2007年12月分 (HP掲載)	12月28日	3.医療用医薬品添付文書情報	月 2 回
4.「JAPIC NEWS」No.285	12月28日	4.一般用医薬品添付文書情報	月 1 回
5.JAPIC「医療用医薬品集」2008更新情報2007年12月版	毎月末日	5.規制措置情報	毎 日
＜速報サービス等＞		6.臨床試験情報	随 時
1.「医薬関連情報 速報FAXサービス」No.614～617	毎 週	7.日本の新薬	随 時
2.「医薬文献・学会情報速報サービス (JAPIC-Qサービス)」	毎 週	8.学会開催情報	月 2 回
3.「JAPIC-Q Plusサービス」	毎月第一水曜日	＜JIP e-InfoStreamから提供＞	https://e-infostream.com/
4.「外国政府等の医薬品・医療用具の安全性に関する措置情報サービス (JAPIC Daily Mail)」No.1603～1621	毎 日	1.「JAPICDOC速報版 (日本医薬文献抄録速報版)」	月 1 回
5.「感染症情報 (JAPIC Daily Mail Plus)」No.219～222	毎週月曜日	2.「JAPICDOC (日本医薬文献抄録)」	月 1 回
6.「PubMed代行検索サービス」	毎月第一・三水曜日	3.「ADVISE (医薬品副作用文献情報)」	月 1 回
7.JAPIC「医療用医薬品集」2008更新情報メールサービス2007年11月版	毎月10日	4.「MMPLAN (学会開催予定)」	月 1 回
		5.「SOCIE (医薬関連学会演題情報)」	月 1 回
		6.「NewPINS (添付文書情報)」(月2回更新)	月 2 回
		7.「SHOUNIN (承認品目情報)」	月 1 回
		＜JST JDream IIから提供＞	http://pr.jst.go.jp/jdream2/
		「JAPICDOC (日本医薬文献抄録)」	月 1 回



医療専門家、患者さんの副作用の早期発見、早期対応のために

重篤副作用 疾患別対応マニュアル 第1集

厚生労働省の重篤副作用疾患総合対策事業として、平成17年度から4年間の計画で作成される「重篤副作用疾患別対応マニュアル」の第1集です。

厚生労働省、医薬品医療機器総合機構のホームページに2006年11月公開の9マニュアル、2007年6月公開の10マニュアルをまとめて見やすい書籍版として発刊!!

今後もマニュアルが公表される度に発刊予定!!

発行 (財)日本医薬情報センター (JAPIC)
発行協力 (社)日本病院薬剤師会

B5判 約400ページ
ISBN:978-4-903449-35-7
お申込先 ☎ TEL 0120-181-276 (税・送料込)

1,680円

ガーデン

このコーナーは薬用植物や身近な植物についてのヒトクチメモです。
リフレッシュにどうぞ!!



七草粥に入れる「春の七草」はかつては各種の説があったが現在は、芹(セリ)、薺(ナズナ)、御形(ゴギョウ・ハコグサ)、繁縷(ハコベラ・ハコベ)、仏座(ホトケノザ・タビラコ)、菰(スズナ・カブ)、蘿蔔(スズシロ・ダイコン)が定説となっている。大言海に依れば「正月七日にこれを羹として食ふ。万病を除くと云ふ。」とある。正に、医食同源の元祖である。
大船フラワーセンターにて。 (ky)

はるのななくさ

JAPIC ホームページより
<http://www.japic.or.jp/>

HOME

サービスの紹介

ガーデン